

第19回 ホームカミングデー

蓮池薫さん、恩師の長内了法学部教授と対談
母校への思いを語る

「帰ってきてよかった」

立ち見もでて、教室は満杯

第19回ホームカミングデーの10月26日、多摩キャンパス3号館の3552教室は、人で溢れ返っていた。開会まで、まだ間があるというのに、すでに座席は全て埋まり、教室の後ろには、立ち見が出るまでになっていた。

教室の壇上には、『対談―蓮池薫氏、恩師と語る―』の横断幕。大勢の人は、本学OBの蓮池薫さんの話を聞きに集まったのだ。

1976年（昭和51年）に中央大学に入学し、北朝鮮に拉致されていた24年間の「真空期間」を経たのち、

今年3月に32年越しで卒業した蓮池さんを迎えた講演会は、ホームカミングデーの企画のひとつとして催された。

最初に、教室に入ってきたのは、蓮池さんの恩師である法学部の長内了教授。長内先生は、開会の挨拶を交えながら、講演会の趣旨について説明され、教室の雰囲気が高まってきたところで蓮池さんを教室に迎え入れた。

**学籍回復に尽力した長内教授
「帰って来るとは思わなかった」**

対談は、蓮池さんがどのような経緯で復学されたのかについてからは

じまった。

中央大学の学部学則では、最大で8年間までしか在籍できない。しかし、蓮池さんが帰って来るのを信じていたご両親らは、蓮池さんの学籍回復を求めて請願書を提出。これを受けた法学部教授会では、当時、法学部長の長内先生が中心になり、学籍回復問題について協議。

「法律家は法を守るのが仕事だけれども、人を生かすために法を使うのも仕事。門を閉じないで、学則を超える知恵を出し合って行こう」という学部長の提案を受けて、1998年6月、教授会では復学を認める方向を確認し、了承した。

長内先生は、当時は振り返り「正直言って、その時、蓮池君を迎える日が現実になるとはとても考えられなかった」と語った。

2002年10月、蓮池さんら5人



ぎっしり埋まった蓮池さんの対談会場

の拉致被害者が帰国、蓮池さんほどもに帰国した奥さんの祐木子さんと新潟・柏崎市の故郷に帰った。2004年5月には、北朝鮮に残していた2人のお子さんの帰国が実現した。

「一番コストがかかった学生」

新潟・柏崎へ出張授業

2004年9月に3年次への復学



思い出を語る蓮池さん

が楽しかった」

あり、先生の話を受けて、新鮮で

なかつた。しかし、復学してからは、授業を受

けると、新鮮であり、先生の話が楽しかった」

なかつた。しかし、復学してからは、授業を受

けると、新鮮であり、先生の話が楽しかった」

なかつた。しかし、復学してからは、授業を受

と学ぶことの楽しさを語った。対談は、さらに弾み、来場者は二人の話に引き込まれていく。

現在、蓮池さんは、新潟産業大学で韓国語の教員をしている。「24年間で身に着けた韓国語を生かそうと考えた。生きていくためには、ほかの人にはないものをやろうと考えた」と話す。北朝鮮に拉致された当初は、「拉致された国の言葉を学ぶ気はなかつた」というが、「いたい俺はどうなるんだ。言葉が必要だ。そう思い韓国語を勉強するようになった」。

長内先生が、蓮池さんの近著『蓮池流韓国語入門』（文春新書）を紹介。これを受けて、蓮池さんは、本の出版にあたり、マスコミの取材を受けた際に、記者が「いい経験だったね」と言ったことに対し、「それは違う。失ったものの方が多い」と反論した話を披露した。

大学3年生の時に北朝鮮に拉致さ

れた蓮池さんが、まず北朝鮮の当局者に言った言葉は、「もうすぐ夏休みが終わるので大学に戻らなければならぬ」だった。「北朝鮮にいる時に、一番思い出したのは小学校。夢にも出てきた。友人も拉致されてきた夢をみて、『お前もか』と思っただけで、起きると、やっぱり俺ひとりかと思つた」と当時の心情を語つた。

拉致される前の大学生時代について蓮池さんは、「校歌を一度も全部歌つたことのない愛校心のない学生だった。自分のことしか考えていなかった」と振り返る。しかし、帰国後は、「中央大学は非常に大きい存在になった」。

「在日だ」と子供には嘘を帰国後は心無い脅迫も

北朝鮮に拉致された失意の中、蓮池さんが考えたのは、「最終的に子供のために生きよう」だった。「100にひとつ、日本に帰れるかもしれないけど、そのために、リスクをおかして子供たちを教育するのは難

いかもしれないけど、そのために、リスクをおかして子供たちを教育するのは難

いかもしれないけど、そのために、リスクをおかして子供たちを教育するのは難

いかもしれないけど、そのために、リスクをおかして子供たちを教育するのは難

いかもしれないけど、そのために、リスクをおかして子供たちを教育するのは難

いかもしれないけど、そのために、リスクをおかして子供たちを教育するのは難

いかもしれないけど、そのために、リスクをおかして子供たちを教育するのは難

しい。ここで生きるために教育して
いこうと考えた。子供には、沢山嘘
をつきました。在日だとも言いまし
た」と語った。

日本に帰国するにあたっては、「怖
かった。一旦日本に帰れば、敵視さ
れる。子供の将来がなくなると思い
不安だった。子供には、国内旅行に
行ってくると言って出てきました」
と揺れ動いた心境を披露した。

帰国後は、「脅迫もあった」という。
「帰れ、この野郎」、「子供のために
帰れ」などといった電話や手紙が届



対談する長内教授(左)と蓮池さん(右)

の期間が終わわり、北朝鮮に戻らな
ければならない日が迫っていた
時、蓮池さんは、日本に残る
決意をした。しかし、その時、
祐木子さんは「何言ってるの。
(北朝鮮には)子供がいるの
よ」と蓮池さんが今まで見た
ことのない形相をして、反対
した。子供がいる北朝鮮に戻
ることを主張したのだ。それ
でも、祐木子さんと長い時間
話し合い、共に日本に残ると
いう決意に至った。

蓮池さんは最後に、「いま

いた。「差出人が『一市民より』や、
何も書いていないのが一番怖かつ
た」。しかし、その時、友人の一人
から、「悪いこと言うやつは、目立
つ。でも支持してくれる人は目立た
ない」と言われて、気持ちはずつと
楽になったという。

帰国当初に夫婦間の「葛藤」 拉致被害者全員の早期帰国を

一方、夫婦間の「葛藤」もあった。

2002年10月の帰国で一時帰国

125周年事業記念募金寄付者 〈第Ⅰ・Ⅱ期〉の銘板除幕式 6500余件の個人、団体・法人名が刻まれる

で正直、『帰ってきてよかった』と
公では言えなかった。でも今は言え
ます。だからこそ、次の方を帰すよ
うにしていたきたい」と拉致被害
者全員の早期帰国実現を訴え、講演

を締めくくった。そして、盛大な拍
手の中、退室された。講演会は、予
定されていた45分を大幅に延長して
終了した。
(学生記者 上田雄太(文学部3年))

第19回ホームカミングデーの10月

法人名が刻まれている。

26日(日)、多摩キャンパスのグリー
ンテラス3階エントランスホールで、
中央大学創立125周年記念事業募
金寄付者(第Ⅰ・Ⅱ期)の銘板除幕
式が関係者を集めて、開催された。

久野修慈理事長は開式の挨拶で、
「寄付をいただいた皆さまへの芳志
は、永続性のあるものとしなければ
ならない」と謝意を表し、「記念事
業では、多摩地区における国際的な
大学としてのシンボルである記念

この銘板は創立125周年記念事
業の趣旨に賛同された寄付者の母校
愛と、団体・法人の方々のご芳志に
深く敬意を表し、顕彰する目的で設
置された。個人は総額5万円以上、
団体・法人は総額50万円以上の寄付
者が対象で、2001年10月の募金
開始から2008年6月30日までに
当該金額に達した方のうち、掲載に
同意された6536件の個人、団体・

館、『21世紀館(仮称)』の建設など
を行い、中央大学が新たに飛躍する
原点としたい。OB・OGの大学に
対する理解があつてこそ強い大学へ
発展できる。本日の除幕式を契機に、
より一層のご理解ご協力をお願いし
ます」と125周年記念事業募金へ
のさらなる協力を呼びかけた。
永井和之総長・学長は、「寄付を



銘板の除幕をする久野理事長、永井総長・学長ら

いただいた皆さまに感謝している。ここには一定の金額以上の方のお名前しか刻めなかったが、1円以上出してくれたすべての人に、全教職員が心の中に銘板をつくり、顕彰したい」と挨拶した。

続いて、来賓として学員会「南甲倶楽部」会長の凸版印刷(株)社長、足立直樹氏から、「南甲倶楽部の目的は母校の発展に寄与することであり、積極的に会員に寄付を呼びかけたところ南甲倶楽部だけで8億円もの寄

付を集めることができた。社会から寄せられている信頼を壊すことなく母校の125周年記念事業に貢献するため、募金活動を盛り上げていくよう支援していく」との心温まる、また心強い祝辞が寄せられた。挨拶が終わると、除幕式に移り、銘板の左右に分かれた久野理事長ら関係者が、「どうぞ！」という合図とトランペットの伴奏とともに、紅白の紐を引くと、白い幕が中心から開いて銘板が公開された。出席から歓声が上

がり、会場はどっと賑やかになった。閉式のあと、出席者は銘板に近寄り、自分の名前を探し出しては顔を和ませながら銘板を見つめていた。銘板は中央大学の過去・現在・未来を結ぶ「21世紀館(仮称)」の竣

卒業生に 突撃インタビュー!!

工時まではグリーンテラス3階エントランスホール内に設置し、同館竣工時にはメインロビー壁面に移動し、末永く顕彰される。
(学生記者 駒田恵二法学部3年)

仲間との再会を喜び、お酒を酌み交わす卒業生の笑顔が溢れていた。ホームカミングデーの10月26日、多摩キャンパスには、あいにくの曇天にも拘らず、大勢の卒業生が訪れ、お祭りムードの場内は活気に満ちあふれた。学生記者もホームカミングデーにお邪魔して、母校を懐かしむ卒業生に突撃インタビューした。

小野塚喜成一さん

(昭和48年度理工学部卒)

◆フレハブ教室だった多摩

「ホームカミングデーには2年に

1度のペースで来ています。私が通ったのは後楽園キャンパスでしたが、その当時、多摩はフレハブ教室でした。随分立派になったものだと思います。

私は白門48会に所属していますが、今日は48会で20人くらいが来ています。48会では2ヶ月に1回、駿河台記念館で幹事会をしています。また毎月、何らかの同好会でイベントを行っています。今年は駅伝の応援に行ったり、沼津アルプスへハイキングに行ったり、カラオケに行ったりしましたね。

在学中の所属学部を超えた交流を

しています。50代後半頃から学生時代が懐かしくなってきました。仕事をバリバリやっていた頃にはあまりそうしたことを感じませんでした。社会の一線を退いてからはよく集まるようになりましたね」

水島則昭さん

(昭和32年度商学部卒)

◆楽しみな

「Hakumonちゃんおっ」

「『Hakumonちゃんおっ』、いつも読んでいますよ」と、学生記者を見つけると嬉しい言葉をかけて下さった。

「読むことが私の生きがいの一つです。70、80歳の人たちはそれを読むことによって、学生時代にタイムスリップして生き返るような気分になれていると思います。」

大学時代の友人で地方にいる人たちに読んだものを送ってあげています。とても喜ばれます。私たちは駿河台しか知らない世代なので、多摩キャンパスの様子を知ることができるとも楽しいです」

楽しみにしてくれている読者の声の音が学生記者にとつて、なによりのご褒美である。

◆国分義信さん

(昭和32年度商学部卒)

◆中央大学をこよなく愛す

「今日は25人で来ています。私は中央大学をこよなく愛しています。」

もう中央大学が好きで好きではないですね。中央大学で学ばせて頂いて今がある。私の原点は中央大学です」と母校を思う気持ちは並大抵でない。

「私はホームカミングデーが始まってから毎年皆勤で参加しています。去年までは家内も一緒に来ていたんだけど、今年は用事があって家内は来られませんでした」とちよっぴり残念そう。

「中央大学のおかげで」というフレーズをインタビュー中、何度も口にしており、母校への深い愛情が伝わってきた。

前野徹さん

(昭和32年度商学部卒)

◆元気に「毎年来てるよ」

「ホームカミングデーは何回目」という記者の質問に、「もちろん毎年来てるよ」と元気に答えて下さった。



懐かしい仲間と歓談する卒業生

卒業生の方々のパワフルなしゃべりに圧倒されていた記者は「もっと自分たちから質問しなきゃだめだよ」とダメ出しを頂いた。

◆山影ヤス子さん

(昭和32年度経済学部卒)

◆女子卓球部をつくったOG

32年度卒グループの中で紅一点、和装で上品な存在感を放っていた。なんとその穏やかな佇まいからは、想像しがたいが在学中は中央大学の卓球選手だったそう。

「私達が女子卓球部を作ったのよ。私たちは下手だったけど今は強いわ」と謙遜するが、今の女子卓球部があるのは山影さんをはじめOGの方々のご尽力があつてこそだ。